

REPORT 縁農援農交差点 「総合的な学習」と農業

「総合的な学習」では、様々な教科を担当する教員が、教科の枠を乗り越えて、子どもたちに生きる力を育てたいと思い学習の内容を作り上げるといった積極的な側面がある。「食」は、様々な教科の教員が関りやすい要素を持っている。私の職場では生徒を全国募集している関係で、地域独特の食生活をそれぞれの生徒が経験している。

たとえば、ここ数年お雑煮の研究している。地域の特徴ある昔ながらの食生活が崩壊する中、お雑煮は地域独特の食材が利用され、料理の仕方も多様である。実際、子どもたちに自分の食べているお雑煮の内容を発表させてみると驚きの連続となる。

食(生活)は、食べることには割合関心を持ちやすい子どもたちの感性にも訴えやすく、「総合的な学習」のテーマにしやすいことはたしかである。

しかし、その食生活が、農家の具体的な生産という営みによって生まれ、育てられてきた事実注目して、学習を深化させていこうという発想は教育現場にはなかなか生まれて来にくい状況があるものたしかである。

たとえば、食生活の根幹である「米」に着目して、その生産の現場に目を向けたとしよう。子どもたちの中には、米の生産現場である田んぼを知らないものもたくさんいる。大都会の小学生にアンケートを取ったところ米が田んぼで生産されている事実を知らずに、工場と答えた子どもがいた。遠足で出かけた田んぼを見て、広いゴルフ場だと答えた子どもがいる実態が報告されたのはもう20年も前のことである。

食べ物がどこで、誰によって、どのように生産されているかを知ることは、人間生活の土台である。だから、生産現場に出かけ、その生産活動の一端を体験させたいという教師は少なくない。

都会では近所に田んぼがない場所もあり、少しでも米のことを知らせたいということで、バケツで稲を育てる実践をした教員も多いと思うし、もう一歩進んで学校の校庭の一角に小規模であるが、学校水田をつくって子どもたちといっしょに稲を育てたということも多々ある。

このような実践は、都会という限界のある環境の中での実践で意味はそれなりにあるかと思うが、実際にはそれは稲作のごく一部だし、稲の持っている絶大な教育力を考えるともっと大胆な展開をこの「総合的な学習」の時間を使って考えていく可能性があるのではないだろうか。

最近、修学旅行などで、田植えや稲刈りの体験をする学校もある。それらの体験は貴重な体験である。しかし、その多くは単に田植えや稲刈りをしたという事実の体験に終わっている場合が多いのではないだろうか？田植えをする前に、農家の人はどのような作業をして田植えを迎えるのか。畦はどのような役割を持っているのか。田んぼの多くにはなぜ水が張られるのか。田植えをした後、農家はどんな作業をするのか。畑で野菜を育てているのと田んぼで稲を育てるのはどのような違いがあるのか。

私の娘が通っている幼稚園(横浜市)では、近所の水田で、冬の田おこしから始まり、夏の暑い時期の草取り、鳥よけのネットかけ、脱穀、精米までの一連の作業を子どもたちと教職員、そして父母が関って行っている。幼児であるので作業としては難しいところがあるが、幼稚園では機会があるたびに子どもたちを田んぼに連れていく。また親(特に父親)たちは、自主的に田んぼに集まり、幼児たちの作業を手伝っていく。親たちが汗をかきながら草をとっている姿を見て、労働することの意味を感じ取っていく。

こうした部分的な体験でなく、トータルな田んぼで作業をするということを通じて得られることは、田んぼとそこで働く人間の持つ教育力であると思う。